

令和 4 年 5 月 1 日現在

機関番号：12611

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2021

課題番号：19K01031

研究課題名（和文）国家儀礼からみた東アジア音楽史の新研究

研究課題名（英文）New study on the East Asian Music history from a viewpoint of national courtesy

研究代表者

戸川 貴行（TOGAWA, Takayuki）

お茶の水女子大学・基幹研究院・准教授

研究者番号：60552255

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、東アジアの君主がみずからの正統性を主張するために、儀礼音楽を整備したという国家論の視点を持ち、儀礼音楽の比較という見地から、その歴史的背景を検討したものである。その結果、東アジアのなかでも、とくに中国古代の儀礼音楽においては、儒教の経典である『周礼』が大きな役割を果たしていたことを解明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は下記の通り。(1)これまで主に芸術性や個別の楽器・楽曲等に焦点があてられてきた音楽史研究を、国家論の視点から新たに再構築した。(2)そうして再構築した中国における儀礼音楽について儒教の経典である『周礼』に注目し、その歴史的背景を解明した。

研究成果の概要（英文）：The monarchs in ancient East Asian countries recomposed ceremonial music in order to declare their legitimacy. In this study, based on this viewpoint, I examined the historical background of the works of ceremonial music by comparing them in each of the countries. As a result, I clarified that 'Rites of Zhou', one of Confucian classics, played a significant role in the formation of ceremonial music in ancient East Asia, particularly China.

研究分野：中国古代史

キーワード：儀礼音楽 周礼

## 1. 研究開始当初の背景

従来の古代東アジアにおける音楽史研究は、主に芸術性や個別の楽曲・楽器等に焦点をあてたものであり、国家儀礼との緊密な関連に注目し、王朝の正統性にまで踏み込んで追究したものは非常に少なかった。それは音楽史研究が戦前からすでに存在するのに対し、儀礼研究が脚光を浴びるのは戦後、なかでも歴史学が文化人類学等の影響を受けた1980年代前後からであったためである。

しかし、現在、古代中国の国家儀礼については、すでに金子修一『中国古代皇帝祭祀の研究』（岩波書店、2006年）をはじめとして、文献を中心とした貴重な研究成果があげられている。また、改革開放以後の経済開発によって、中国都城の遺跡発掘が陸続と行われており、近年の佐川英治『中国古代都城の設計と思想 円丘祭祀の歴史的展開』（勉誠出版、2016年）に見られるように、考古学的な調査報告を積極的に取り入れた新たな儀礼研究の成果も生まれている。

こうした古代中国の儀礼研究をさらに発展させるべく、近年、それを音楽史研究と結びつけた渡辺信一郎『中国古代の楽制と国家 日本雅楽の源流』（文理閣、2013年）が刊行された。同書は、これまでどの研究者もなしえなかった儀礼と音楽史の結びつけという新たな切り口から、漢から隋までの国家論を検討したという点で、極めて画期的であった（渡辺氏前掲書については、拙稿「書評：渡辺信一郎『中国古代の楽制と国家 日本雅楽の源流』、『史学雑誌』第123編第11号、2014年 参照）。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、上記の成果を踏まえ、これまで儀礼音楽の研究が手薄であった東晋南朝から隋唐にいたる部分を補い、それを他の東アジアの儀礼音楽と比較しながら、中国古代の儀礼音楽の特徴を新たに発見し、その歴史的背景をも解明することにある。

## 3. 研究の方法

本研究では、中国古代の儀礼音楽に関する史料のなかでも、とくに正史の楽志・音楽志を解読し、国家儀礼との有機的結合を分析した。その際、古代の中国にとどまらず、他の東アジア地域における国家儀礼および儀礼音楽の研究成果も積極的に取り込んだ。

## 4. 研究成果

本研究は、東アジアの君主がみずからの正統性を主張するために儀礼音楽を整備したという国家論の視点をもちいて、儀礼音楽の比較という見地から、その歴史的背景を解明するものである。

上記にもとづき、唐から研究を始めた。論文「中国古代の音楽と政治」（『歴史と地理』第724号『世界史の研究』259、山川出版社、2019年5月）を公表し、これまでの研究を踏まえつつ、新たに則天武后期および章后期の儀礼音楽について従来指摘されていなかった点を述べた。具体的にいうと、則天武后については中国王朝の儀礼音楽において通常記されるはずの歌曲名が書かれず演奏の順番のみが記されるという特徴がみられること、章后についてはその政治的台頭が当時の唐の儀礼音楽に強く影響を及ぼしたことを新たに指摘した。

次に注目したのは、北朝の儀礼音楽である。論文「華北における中国雅楽の成立 五～六世紀を中心に」（『史学雑誌』第129編第4号、史学会、2020年4月）を公表し、これまでの研究を踏まえつつ、新たに北朝、隋の儀礼音楽について従来指摘されていなかった点を述べた。具体的にいうと、北朝については雅楽に西域由来の音楽が導入されたが、それをあたかも伝統的なものであるかのように見せるために『周礼』が利用されたこと、そうした『周礼』の利用には南朝の『周礼』研究が大きな影響を与えていたことを新たに指摘した。

続いて、中国の儀礼音楽のあり方に大きな影響を与えた、儒学の経典『周礼』をテーマにした論文を公表した。それと並行して、一般向けに『周礼』と儀礼音楽の関係の他、東アジアと正統性の問題を扱った文章も公表した。

論文については、「南朝の天下観と伝統文化」（荒川正晴編『岩波講座世界歴史』第6巻〔中華世界の再編とユーラシア東部 四～八世紀〕、岩波書店、2022年1月）を公表し、これまでの研究成果を踏まえつつ、中国の儀礼音楽における『周礼』の重要性について論じた。具体的にいうと、魏晋南北朝時代の『周礼』には、もともと中国の周辺あるいは地方の制度・思想に過ぎなかったものを王朝の「伝統文化」に変換する役割があったことを述べた。

一般向けの文章としては、岡田和一郎・永田拓治編『漢とは何か』（東方書店、2022年3月）において、第5章「漢から周へ 東晋南朝」、コラム「天下の中心の測り方」の執筆を担当した。前者は上記の論文の内容を一般向けにわかりやすく解説しつつ、新たに研究史における意義を説いたもの。後者はこれまでの研究成果を踏まえつつ、南北朝時代に正統性をめぐる王朝間の争いが、自国に有利になるような『周礼』の新たな解釈を生んだとするもの。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 戸川 貴行	4. 巻 129編4号
2. 論文標題 華北における中国雅楽の成立 五～六世紀を中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 史学雑誌	6. 最初と最後の頁 1-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 戸川 貴行	4. 巻 259
2. 論文標題 中国古代の音楽と政治	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 歴史と地理	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 戸川 貴行
2. 発表標題 南斉・梁における『周礼』の受容について
3. 学会等名 東方学会・秋季学術大会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 荒川 正晴、大黒 俊二、小川 幸司、木畑 洋一、富谷 至、中野 聡、永原 陽子、林 佳世子、弘末 雅士、安村 直己、吉澤 誠一郎	4. 発行年 2022年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 322
3. 書名 中華世界の再編とユーラシア東部 4?8世紀	

1. 著者名 岡田和一郎、永田拓治	4. 発行年 2022年
2. 出版社 東方書店	5. 総ページ数 268
3. 書名 漢とは何か	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------